
墨空

yorozu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墨空

【Nコード】

N0071BA

【作者名】

yorozu

【あらすじ】

神々が気まぐれに滅ぼした大地で、希望もなく人々は生き続ける。人の心の失われた墨色の空の下、少年は天使に出会い、時と運命に抗う旅に出る。

仮想の目次（前書き）

全体構想の目次です。

小説本編ではありません。

この通りに進められたらいいなあと思いますが、
どう考えても自分の首を絞めているようにしか・・・。

全く変わってしまうかもしれませんが、その時はその時です。

仮想の目次

【目次】

第一部 未孵化の反乱分子

墨空の異端者 逢瀬

期待値

闇包む帯（1）

神々

第二部 教会

墨空の異端者 盲目

従順の拒絶

対極の同盟者

邪気と無邪気

優しい調べ

二人の邂逅

数学の報復

第三部 異常の瓦解

墨空の異端者 逃亡

私は道化じゃない

双子の見解

縁の交錯

迷宮の子犬
学者の遺産

第四部 趨勢の逸脱

墨空の異端者 人待つ名
空に見たもの
神話の探索
未来へ至る道
黎明の議決
虚構であるべき事実

第五部 旅立ちの道標

墨空の異端者 掟
墨の災厄
私が私であるがゆえに
別離の前兆
別離の峻拒
魔との遭遇
冒険者の賭博
準備、完了

第六部 咆哮の慟哭

墨空の異端者 事実
魔と天使が見る先

窮地の寓話
潜入の酷薄
信頼の謀反
まだ死なれちゃ困るの

第七部 決戦の邂逅
墨空の異端者 隘路
檻の飼い犬
でもそれは間違っ
ていて
執行
真実の捏造
腐敗の認識
教会 数学者の到着

第八部 孵化の反乱分子
墨空の異端者 結集
例え誤っ
ていようとも
真実の究明
神意の代行者
教会 魔と天使の到着
教会 信じる者の到着
教会 彼女の到着

第九部 破壊の牙痕

墨空の異端者 混沌

教会 各々の戦い

扉の解放

統治者の復活

悲哀の史実

操主と創主

痕百の創主

自分対自身

彼女の革命

彼女の秘策

神意の失墜

どうすればいいのかわからなかった

第十部 重なる神話

墨空の異端者 存在

記憶の一端

天使と信じる者と司書と

数学と現在と

魔の導き

天蓋の裏

生誕の兆し

第十一部 秩序の再生

墨空の異端者 意志

拡散

神々の妨害 ソラ

真偽の導き

神々の妨害 数学者

司書の涙

神々の妨害 信じる者

誠なる真の道化

現在の原罪

継承者の傍観

全ての疑問を隠蔽する場所

第十二部 真実の意義

墨空の異端者 侵入

決意の悲嘆

再会

数学の補完

やっぱりわたしはあなたが好きです

魔と零

明かされる真実

天地

十年前の鍵

第十三部 未来の決着

墨空の異端者 大好き

神意の継承

道化と先導の真意

闇包む帯(2)

立ちほだかる未来

私は数学者じゃない、冒険者だ
負けないよ
女神の解放

第十四部 未完成の覚醒

墨空の異端者 覚醒

無力に泣いて愚かに叫んだ

慟哭と喝采

人間になった神と女神になった天使

定義別離統合

第十五部 二人の結末

墨空の異端者 回想

一瞬と永遠の等価交換

永遠と永遠の等価交換

神と人間と一人の少女へ

彼女の名前

幕開けの挨拶

起伏のない、無感動な合図とともに。僕らのお膳立てする劇の幕が開く。

それは喜劇？それとも悲劇？

もちろん、その両方。

僕らの喜劇、彼らの悲劇。

大人も子供も寄っといで。

生と死の入り乱れる、混沌と激情の劇場へようこそ。

お代はもちろんいりません、そんな陳腐な物は、もう意味を為しませんから。

僕らの喜劇、彼らの悲劇。

嘘と誠の二重奏。華麗なる懺悔の逆上。

血塗られた魅惑をその身に感じることはもちろんのこと。至福の結末をどうぞ。

僕らの喜劇、彼らの悲劇。

哀歡を共にし、愛吟しましょうその口で。

深夜と黎明、その狭間。月と太陽、その境界。希望と絶望、その混

濁。

僕らの喜劇、彼らの悲劇。

さあ楽しみまう。

そして始まる。悲哀なる運命の物語。

幕開けの挨拶（後書き）

本編と言う本編のないままに、色々な視点からゆっくりと物語は展開していき、やがて急転を迎える。

そんな小説にしていきたいと思っています。

こちらの他に「ペネトレチカ」というタイトルでも連載を始めました。

そちらの方が更新ペースは早そうです。

世界の系譜

暗澹たる闇色の空。夜ではなく。曇天とも違う。

闇に浮かぶのは赤い星々。どれもが炎のように紅く、血のように赤く。

星に見えるそれらは、しかし星でなく。

元来白光を放つ真実の星と比較して、暗色に浮かぶ偽物の星は、あまりにも禍々しく、あまりにも美しすぎた。

墨色の空とは異なる、偽装の星空　此処が、あの場所でない証左。

眼前には二人の少女。そのどちらもが星々に劣らず見目麗しい。

透き通るような蒼い瞳に、涙を溜めた少女。

血溜りのような空間から再び生誕した少女。

前者は両手足を拘束され、後者は前者の首を締め上げている。

ふと。二人の少女がこちらへと視線を転じる。

一方は救助を訴え、一方は返答を急かしている。

蒼い瞳　それは裏切りの色、信頼の謀反。

最も近く、最も遠い二人。

最も酷似し、最も異なる二人。

選択を迫られていた。

二者択一。どちらか救う そんな夢を抱くことは許されない。

何度も口を開きかけ、しかし言葉は虚空に霧散した。

少女の首を締める指先に、より一層の力がこもるのが見える。

時間は残されていない。

時間 否。時の概念の消失した虚無の中に、残存、残滓と言った概念もまた、無い。

何処よりも曖昧で、何処よりも揺らぎ、何処よりも遠い場所で。

長きに渡る永遠に、終止符を打たんと。

あるいは封印を解く呪文のように

あるいは魔を浄化する詠唱のように

あるいはパンドラの箱を開けるように

答えを紡いだ。

「……お前の、名は

女神別離・戦の歌姫・アローデ」

答えを紡いだ。彼女の真名を。

言葉とは儂く、脆い。

約束は、違えられる。

誓いは、破棄することができる。

言葉、約束、誓い。守ることのできなかつた、たつた一つの

そして世界は滅びた。

世界の系譜（後書き）

1話に続き詩のような文章を掲載してしまいましたが、次回より小説らしい小説になります。

気長に付き合っただけならば幸いです。

カランカラン……。

割れて一部を損失した風鈴が寂しげな音を奏でる。喫茶に風鈴はどうかと思う。幾度となくマスターに言ってきたが、一向に、自分を迎え入れるこの音に変化は訪れない。この時代に物資の調達が如何に困難なのかなど周知の事実だが、やはり場違いな印象を拭いきれない。

店内は相変わらずホコリ臭い。破損の目立つ五つのテーブルには、料理の他にホコリが降り積もっていた。清潔感の欠片もない。それでも抗議の声が上がることはない。

ここを訪れる者には、衣食住を満足にこなせる者だっていないのだから。

不潔と隣り合わせの生活を送っている彼らが、果たして抗議の声をあげるだろうか。笑い話にもならない。

寂れたカウンターの奥に目を向けると、マスターと目があった。この世に社交辞令もないだろうが、沈黙よりはマシだろう。腕を適当に上げて、言う。

「こんにちは」

「一人か？」

返ってきたのは、挨拶ではなく問いだった。

何と意味のない問いだろう。思わず口を苦笑の形に歪める。一人なのはこちらを見れば一目瞭然だろうに。答えるのも億劫だ。返答そ

つちのけでカウンターの一席に座した。

「あの娘はどうした？」

「水」

どうしてこう彼は人の傷を抉り出そうとするのだろう。一番触れて欲しくない、最も痛む傷に情け容赦のない打撃を与える。もっとも彼の言葉が鎮痛剤になる事など、初めから一辺の期待もしていなかったが。

マスターの態度に心持ち気を悪くして、カウンターを挟んで目の前にいるそいつを睨みつける。もっとも、屈強な肉体を誇る彼にそんな脅しが効くとは思えなかったが。

案の定、マスターは片手に水の入ったグラスを持ちながらも、それをこちらへ渡そうとしない。自分の方が格上なんだ、お前は俺に話すべきなんだ、マスターの態度はその心中を滑稽なほど如実に語っていた。生命を生み出し、育む源である水。それを与えることのできる自分は、ねだるお前などよりも遥かに高明なのだ、そう言いたげな視線にうんざりした。

胸中では今すぐにでもこの店をぶち壊してやりたかったが、ここにはこの掟がある。最近組みあがった鉄の掟だ。それだけは破るわけにはいかない。約束を交わしたのだから。やるかたない思いで、無愛想に答える。

「いなくなった」

「どこへ？」

間を置かない即答。どこへ行ったのか。その答えを口に出すと、涙腺がはちきれそうになる。一度決壊すれば、きつと、涙は止まらなくなる。

人前でそんな醜態をさらすわけにはいかない。特に、目の前の奢り高ぶった勘違い野郎の前では。自制を掛けて何とか踏みとどまる。なるべく淡白に映るよう無愛想に答えた。

「天国」

「殺したのか」

「違う！」

あまりにも的外れで、あまりにも的を射たその言葉。うんざりだった。淡々としたマスターの口調。解かっている。この世界で同情や直情は過負荷となり足枷となり、己の歩みに支障をきたすということなど。信じられるのは自分だけだということなど。

その観念が当たり前だったし、今でもそれは間違っていないと思っている。ただ変わったのは、その観念に疑問を持ち始めたということ。そしてその疑問が晴れる時は、多分、俺には未来永劫訪れない。何より不自然ではないか。皮肉にも慣れてしまった今の環境に疑問を持つことなど。

だが、それでも彼女は、過負荷を過負荷とせず、足枷を足枷としなかった。甘んじてそれを背負い、己が信念を貫いていた。

彼女の結末を知り、正直者がバカを見たと言われ罵る者もいるだろう。その程度かと思限り忘れてしまう者もいるだろう。相手にすらしない者もいるだろう。

万人が彼女に罵声を浴びせようと、しかし俺は、俺だけは。一時のことなれど、その激情が腹を満たし、渴きを忘れさせた。吐息一つ。今、水を嚥下したところで美味いと感じることはないだろう。

諦念も露に席を立ち、訪れた時と同様に扉をくぐる。

カランカラン……。

寂しげな音を良く響かせるその音は、しかしどこか乾いた音に聞こえた。

空を仰ぎ見る。

昼夜を問わず姿を変えることのない空。

今日もまた、

荒んだ墨色が、空を覆っていた。

彼女に初めて会ったのは一ヶ月前の、正午を回ったころだったと思う。

今思えば、最悪の出会いだった。

腐った街の瓦礫道を闊歩していると、突如、前方数歩分の距離で瓦礫の山からホコリが舞ったのだ。思わず歩みを止めた。不測の事態にいぶかしみ顔を歪めながらも、何が起きたのかは己の動体視力が捕らえていた。

上空から大きな【何か】が降ってきたのだ。雨である事は有り得ない。神の愚行により干からびたこの世界に天よりの恵みは決してない。

十年前。天から人間を見下ろす神々は、何らかの要因で己が地位に不満を持ち始めた。見下ろす立場の何が気にくわないのかは、人間であるこの身では到底理解出来ない。

神々がそれぞれの役割に甘んずる事で均衡を保ってきたこの世界は、崩壊を始めた。神々が天上で仲違いをし始めたからだ。

天上で憎み合い、天上で罵り合い、天上で争っていた。だというのに、被害を被ったのは、むしろ人間や動物、植物の住まう地上だった。

神々の暴力による被害は天に収まりきらなかった。許容限界を超え溢れ出した力は災いへと変化し地上へ降りかかった。当時まだ七歳だった俺ですら、あの地獄絵図は鮮明に記憶している。三日に一度は夢に現れる、破壊の連続。前例のない異常気候が病を呼び、炎が降り注ぎ、暴風が吹き荒れ、津波が起こり、土砂は崩れ。

およそ考え得る天災が一度に降り注いだ。

一週間も経てば、いつのまにか地上は腐り果てていた。

発展もピークを迎えた高度な文明社会は滅び、代わりに瓦礫だけを残していった。荒んだ世界を象徴するように空は暗澹たる墨色に染まり、日が差さなくなった。雨が降らなくなった。世界から、気候という概念が消失した。更に、命の根源である水を抱える海は例外なく干上がるか、汚泥に汚染された。

希望から一転、絶望が世界を支配した。初めは復興に努める団体が数多くいた。つい先日までそこにあった希望を掬い上げようと汗にまみれる者達がいた。世界全体がかつてない規模での団結力を示し、皆が必ず希望はあると盲信した。

だが。そんな運動も長くは続かなかった。

必死になって希望を探せば探すほど、皮肉にも、人々は絶望という現実を探し当てた。

大地は瓦礫と化し、植物は枯渇し、空は世界を別色に塗り替えた。人間が諦めるには十分すぎる要素の数々。海も汚れた今では水ですら満足に手に入らない。地下水を頼りに、今は何とか命を繋いでいるが、五年経てばどうなっているのかは、想像に難くない。

復興に努める声は段々とその数を減らし、ついには、なくなった。人間の敗北の瞬間だった。承った覚えもない神との喧嘩。結果、人間は大敗し、失ったものはあまりにも多すぎた。納得のいくはずもない怒りと悲しみ。

人間の怒りのやり場は当然神に向けられた。自分達の都合で世界を崩壊させた神々。神が蔑みの対象となるのに、時間は掛からなかった。

確実に滅びへと歩む世界。絶望に支配されたこの世界には、法や思いやりなどは存在しない。完全な無法地帯となったこの地で信頼できるのは自分だけだ。

空から降ってきた得体の知れない【何か】にも、やはり十分な警戒を注いでいた。

一分ほど凝視していただろうか。やがて舞い上がったホコリは晴れてきて、落ちてきた何かのシルエットが視認出来るようになる。

それは　　。

「人間？」

意外な正体に、思わず思考が口をついて出た。それは人型をしていた。

警戒は解かないまま、ゆっくりと近づく。まだしつこく辺りに立ち込めるホコリを手で払いながら、眼下にそれを見下ろせる位置まで移動した。人型をしたそれは、女だった。それもまだ少女と呼んでいい年頃。

腰までの黒髪に、ホコリまみれで多少土色を帯びた白のワンピース。

それから。

ふと彼は眉根を寄せた。

続いて彼の目に飛び込んできたそれは、羽だった。

背中から生える一対の羽。

その姿は、まるで天使のようだった。

神の御使いである、

天使。

蔑みの、憎しみの対象である、

天使。

それが、空から降ってきた。脳内に浮かび上がる数々の疑問も、最早何の必要性も示さない。推論を並べ立てる必要はなくなった。

諸悪の根源である神の御使いを目前にしてから、俺が理性を失うのに時間はいらなかった。心中に潜む闇色の、腐った衝動に我が身を任せた。

本能に近い殺意の衝動。

理性のはじけた快感に、しばし陶醉していた。

「……………なさい……………」

どれだけの時間が経ったのだろうか。途方もなく長い時間にも、一瞬にも感じられる。

か細く、弱々しい小枝のように儂い声に理性を取り戻した。

ふと気付けば、眼下の少女を組み敷いて、両手に首を捕らえていた。酸素を求め喘ぐ少女。悲しみの瞳からは涙を流し、許しを請う眼差しを向けていた。

その様子を見た限りでは、彼女が世界を崩壊させた患者の御使いなのだとは到底思えなかった。

もしかしたら、自分は何か間違った事をしているのではないか。

唐突に浮かぶ一つの疑問符。それは眠っていた理性を呼び覚まし、俺を冷静にした。溢れ出る激情を抑え、大きく動悸する心臓を落ち着かせた。

観察眼を光らせてみれば、妙な点があった。今まさに自分が殺そうとしている天使の羽は、正よりも負を象徴する墨色だった。ちょうど、空を覆う忌々しい墨色に似ていた。

神話やおとぎ話での知識でしかないが、普通天使の羽は白でなかったか。人々を悪魔から守護する存在。それが本来の天使の存在意義だと聞いた事があった。

そんな存在が墨色の羽を持つ。やはり違和感がまとわりつく。不自然さから来るある種の畏怖を拭いきれない。

神の御使いたる天使とは違うのかもしれない。

そんな疑念から、憎悪の矛先となっていた両手を放した。

今思えば、それは心のうちのどこかで彼女を助けたいと思っただけなのかもしれない。何とか理屈をつけて、憤る自分を言い聞かせて、彼女を助けたかったのかもしれない。

突然空気を肺に流し込んだせいか、少女は激しく咽こんだ。□元と首を白い手で押さえながら少しずつ呼吸を整えていく。

やがて咽ぶように激しい呼吸が規則正しいものへと落ち着いていく。すると少女はこちらに恐怖と軽蔑の入り混じったような、複雑な視

線をよこした。

違和感。その視線にまたそんな感覚を抱いた。ただそれは、先程とは違った。その違和感は少女の瞳に向けたものだった。

確かに彼女の黒瞳は視線を送っている。それでも、何故だかこちらを見ていないような気がした。そんなことが有り得るのだろうか。

少女と目を合わせてみても、やはり同じような違和感。目が合っていて、目が合っていない。

「……………どうして？」

まわりつく違和感が、その一言で一掃された。耳に届いた声色は、およそ彼が聞いた誰のものよりも澄んでいて、なおかつ美しかった。ハーブを連想させるソプラノ。

ただ惜しく思ったのは、彼女の言葉が恐怖に震えていたことだった。苦笑。誰が彼女をそうさせたと思っている。

「……………どうして？」

返答を待つ少女は、いつまでも答えない事に耐えかえたのか、同じ問いを重ねた。

怯えきつた瞳に涙を溜めてこちらをじっと見つめてくる。

それを天使と断定できたならば心情的に苦はないのだが、疑問を持つてしまった以上、そういうわけにもいかない。気まづくなって、視線を逸らした。

「お前、天使？」

結局答えを返せなかった。卑怯なのは承知していたが、問いに問いを重ねて誤魔化す。

「合ってるけど、違う」
「どっちだよ」

パルドキシカルな少女の返答。しかし曖昧とも違っていた。彼女は口籠もったりせず、ハッキリとそう言ったのだから。

ふと墨色の羽が頭を垂れるようにしなびた。覇気を感じられないその仕草は、俺の目にどこか寂しげに映った。感情と同調するのだろうか、少女の表情も寂しげだ。

「天使だったけど、神様に怒られちゃって。堕天使にされちゃったの」

沈痛な面持ちに、無理矢理笑みを張り付かせて告げる少女は、見ていてとても痛々しかった。目の端に光る涙は、果たして首を締め上げられた時の名残か、神の叱咤によるものか。

「堕天使って、ああそうか。だから堕とされたのか」

わざとそっけない口調で言った。そうでもしなければ、少女の重たい雰囲気にもまれそうだったからだ。腐った世界での生活という重しを既に背負っているのだから、これ以上背負わされるのはごめんだった。少女への感情移入を寸断した。

まあとりあえず、これで彼女への憎悪は　あくまで、とりあえずだ　消えた。神の機嫌を損ねて堕天使になったと彼女は告げた。それはつまり、人間の敵である神との意見の不一致を差す。ならば、少女は人間の味方だ　と、思う。

「お前、これからどうするんだ？」

何の気なしに尋ねてみる。

敵でなく、人間でもない。ある意味で特別な存在である彼女に興味
が湧いた。

恐らくこの時の俺は、珍妙な物へ向ける視線を彼女に向けていたこ
とだろう。決して同情などという綺麗な感情ではなかった。

「分からない。あなただつたら、どうする？突然家を追い出されて、
まったく知らない所に置いてきぼりにされたら、どうする？」

墨色の空を仰ぎながら、少女は問う。考えるまでもなかった。実際
に、自分は十年前同じような境遇に立たされたのだから。物理的に
は同じ世界でも、概念的には全く違う世界。高度な文明を持った世
界から、全てが腐った世界へと追いやられた。

そのときの惨めな体験を少女に話してやろうと思ったのは、恐らく
親切心などではない。これからお前も同じ体験をするのだと、嘲笑
していたのだ。

「まず人に頼った。それで誰も頼れないと分かると、寝るところを探
した。それから水を探した。食い物を探した。暖かい布団を探した。
どれも見つからずに泣いた」

語るうちに、そのときの寂しさや空しさが込み上げてきて、涙が出
そうになった。

空を仰いで、込み上げてくる涙を何とか流さないようにしていると、
ふとしゃくりあげるような泣き声が聞こえた。それに対しての驚愕
が好をそうしたらしい、溢れ出そうになる涙は止まった。視線を再
び眼下に向けると、少女が両手で顔を覆っていた。

「……………ごめん……………私達の……………せいだよね……………」

少女の嗚咽に、耳を疑った。彼女は哀れんでいる。こんな境遇で生

きなければならない自分を　人間を。

もう何年も思いやりや哀れみといった感情には触れていなかった。そんなものはもうこの世に残っていないのだと、誰もが諦めていた。

だというのに、ないと諦めていた温かな感情が、今、目の前にある。

神への反逆によって天から墮とされたとはいえ、忌むべき存在であるはずの天使。

その時の俺は、ただただ戸惑うばかりだった。でも今なら分かる。

少女こそ、この世界が求めてやまなかつた本当の天使であり、希望なのだ。

「別にお前のせいじゃない。お前は世界を腐らせた神に逆らったからここにいるんだ。だったらむしろ心情的には人間と同じだ」

やはりそっけない口調でしか返せない自分に、幾ばくか苛立ちを覚えた。長年使っていないなかつた感情は、そう簡単に表へ出す事が出来ないらしい。

今思えば、その時の自分はどうかしていた。敵の敵は味方であるなどと甘い方程式を、その時の俺は疑いもしなかつたのだから。彼女が人間の敵になるのではないか、などとは微塵も考えなかつた。

無愛想な言葉に、しかし少女は律儀にも礼を返した。下ろしたままだった腰を上げて砂を払い、赤みを帯びた瞳を真っ直ぐに向けてきた。

「ありがとう……。そう言ってもらえると、少しは楽」

「まあ、色々あるだろうが、生きてるよ」

口ではそう言うものの、少女がこの世界で暮らしていくことが不可

能なのは、火を見るよりも明らかだった。騙し欺かなければ生きていけない世界なのだ。思いやりや直情は足枷にしかない。この少女は、この世界の環境に適していない。

そんなものを引きずって歩いていれば、いつか確実に足が動かなくなる。

このままでは、少女は近いうちに餓死するか、人身売買にかけられ性欲処理の道具となってしまうだろう。

「うん、頑張るね。あなたに教わった生き方を試してみるよ」

少女は、己を待つであろう未来に臆した様子もなく明るく言って見せた。

教えた生き方が全く無益だと言うことは、俺自身が証明しているというのに、少女は、そんな不確かな方法で生きようとしている。笑うことすら出来なかった。

少女のあまりの真っ直ぐさに目を背けたくなくなった。

少女は無邪気に言う。

「だから、あなたに頼る」

「へ？」

「頼りたいな」

少女の言葉に啞然とし、しばし言葉を失った。何を言っているのだろうと、理解に苦しんだ。

彼女の意図を理解したところには、少女はすっかり萎縮してしまっていた。それだけ理解するのに時間を要したということだ。その沈黙を不許可と取ったのだろう。

考えてみれば、少女は自分の教えた方法で生きていくと、そう言っ

ただ。

まず人に頼った。自分の言動を思い起こしてみれば、確かにそう言っていた。

つまり、彼女の言葉は半ば当然とも言える。ここには二人しかいないのだから、彼女にとって頼れる人間など自分しかいないではないか。

改めて少女を見れば、小動物のように小さくなって不安そうな眼差しを向けていた。

つい数分前に自分を殺そうとしていた人間に、彼女は助けを求めている。少女は臆していないのではない、不安を押し殺しているのだと、そのとき初めて理解した。

殺してくるとも知れない男についていこうとする少女。何を企てているのだろうと一瞬考えあぐねる。が、彼女の企みを暴く事は出来なかった。元々そんなものはなかったのだ。暴けるはずもない。

「あー……」

「だ、だめかな、やっぱり？」

しばし迷って、吐息一つ。

「とりあえず、一日だけだ」

今でもはっきり思い出せる。あの時の少女の何と嬉しそうだったことが。

よろしければ、評価いただけましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0071ba/>

墨空

2011年12月31日02時47分発行